

藝大の在校生・卒業生は、  
公募展やコンクールで栄誉ある賞を受賞し、  
また各分野の最前線で活躍している。  
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

第17回 JPPA AWARDS 2013 学生部門 ドキュメンタリー・その他部門ゴールド賞受賞

## 池尻 貴尚

◆大学院美術研究科デザイン専攻 修士課程1年

アニメーションは小さい頃から好きで、小学生のときには教科書の隅にパラパラ漫画を描いて、クラスの友だちに見せたりしていました。テレビアニメも観ていましたが、もっと大きなきっかけは、実家が印刷業を営んでいたことです。工場ですから紙がふだんにあり、いらなくなった紙をもらって遊んでいるなかで、パラパラ漫画に夢中になってしまったのです。

中学生になるとパソコンを使い、デジタルでアニメーションをつくるようになり、インターネットの掲示板で、同世代の投稿者と作品を批評し合ったりするようになりました。その頃の仲間のなかには、藝大の大学院映像研究科アニメーション専攻に進んだ人もいます。高校時代にはホームページをつくり始め、モノクロのアニメーションが地元的一般向けコンペで受賞もしましたし、東京のテレビ局の投稿番組で大賞をいただいたこともありました。

ばくがアニメーションに惹かれたのは、

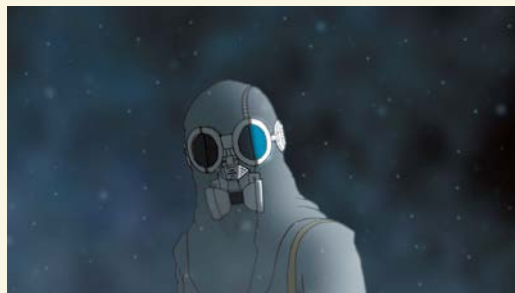
アニメーションの面白さとは、絵のクオリティや密度に関係なく存在し得るということをつくっていくなかで知ったためでした。絵と絵のあいだをつなぐ「間」のようなものに、作品のおもしろさや作家性が出てくる。キャラクターのデザイン自体はシンプルなものでも、そのキャラクターが動き出した途端に、性格が生まれ物語が始まる。そこに作家の個性が滲み出てくるのです。

藝大に入って、1、2年生のときは、課題に応じてグラフィックや立体をつくっていたのですが、卒業制作に取り組むにあたって、3年からは意識してアニメーションをつくるようになりました。でもそのときにつくったものは、作品というより、デザインのなかにおけるアニメーションといえる、提案にとどまるものばかりでした。ですから今回賞をいただいた『海碧の街』は、大学に入ってから初めての作品といえるものです。タイトルの「海碧」はコバルトブルーのことで、ある放射性物質の名前からヒ

ントを得て名付けました。最初は震災を重要なモチーフにしようと思っていました。けれども最終的にこういったモチーフは背景に退き、人がつくってきたものが壊れたときの怖さみたいなことがテーマになっていきました。

作品のなかに「事故」や「原発」というような言葉は出てこないのですが、そういった暗い過去があったことを匂わせる未来の世界の、あるひとりの少年の心の葛藤を描いたつもりです。

東日本大震災の被災地には何度も足を運び、福島第一原発周辺の立ち入り禁止区域の近くに住んでいる人にも取材しました。でも原発に対して、反対と容認のどちらにもつけないで、ずっともやもやしていたんです。そういったなかで、作品をつくることで自分自身が見えてくるのではないかと思い、また作品を観た人に考えるきっかけを与えたいと考えてできたのが『海碧の街』でした。



『海碧の街』(2013年)より

いけじり・たかひさ

1988年島根県出雲市生まれ。2013年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、同大学院美術研究科デザイン専攻入学。『海碧の街』で第17回 JPPA AWARDS 2013 学生部門 ドキュメンタリー・その他部門ゴールド賞を受賞。ICAF2013 (Inter Collage Animation Festival) に出品し、全国6カ所で上映。

第82回日本音楽コンクールフルート部門1位

# 松木 さや

◆大学院音楽研究科器楽専攻（フルート）修士課程1年

3歳のときからピアノを習い始めて、音楽にはずっと親しんできました。音楽の部活をしたくて、小学4年生で吹奏楽部に入りました。フルートとの出会いは、母が吹かずに持っていたフルートが家にあり、手にしたのがきっかけです。5年生からは、もっと上手になりたいと、地元の千葉縣市川市のレッスンセンターに通うようになりました。個人レッスンを受けると、どんどん楽しくなってきました。できることもできないことも増えていて、のめりこんでいったのです。中高のあいだもずっと吹奏楽部で、個人レッスンとみんなで楽しく演奏することを両立させていました。

中学に入り、全日本学生音楽コンクールを受けるようになると、そこで厳しい評価を受けて、自己満足で終わってはいけなそう考えるようになったのです。同じ

中学生でも私とはレベルが違うと、音楽の深さを身に染みて感じました。その後、コンクールでようやく賞もいただけるようになり、自分には音楽しかないと、音大への進学を志すことにしたのです。

藝大に進みたいと思ったのは、音楽の道を選ぶなら藝大と考えたからです。実際に藝大に進学して分かったのは、環境がすばらしいことです。周りがみんな高いレベルで、音楽に対して考えていることもひとりひとり違います。そこがとても刺激的でした。会話や一緒に演奏する中で音楽の情熱が伝わり、衝撃的でもあり、勉強になりました。

日本音楽コンクールでは、予選のあいだずっと緊張の連続で、演奏が終わっても先に進める手応えなど、自分ではわかりませんでした。本選で演奏したのは、モーツァルトのフルート協奏曲の第1番ト

長調。5人の演奏者のうち3番目で、休憩後の演奏でした。オーケストラのみなさんと休憩室から一緒に出ていく形になり、温かい雰囲気の中緊張が解け、演奏できたのがとても幸運だったと思います。

藝大では現在、高木綾子先生(器楽科准教授)に教わっています。先生のご指導で最も印象的だったのは、「あなたはどうか演奏したいのか」と聞かれたことです。これまでは自分の技術に限界があり、先生のおっしゃった課題をこなすのに精いっぱいでした。「どうか演奏したいか」という問いかけに、最初は自分の考えを導き出せませんでした。しかしそれ以来、自発的に自分で考えて音楽に取り組むようになりました。それがだんだん自然にできるようになり、そこから自分が大きく変わっていったのではないかと思います。



第82回日本音楽コンクール(2013年)  
フルート部門での演奏  
写真提供: 毎日新聞社

まつき・さや

1990年生まれ。千葉県出身。9歳よりフルートを始める。東京藝術大学音楽学部管打楽器科を首席で卒業。安宅賞、アカンサス音楽賞、三菱地所賞受賞。第62回全日本学生音楽コンクールフルート部門高校の部東京大会第1位、全国大会第1位。第29回日本管打楽器コンクールフルート部門第1位、文部科学大臣賞、東京都知事賞、東京ニューシティ管弦楽団特別賞受賞。第23回日本木管コンクールフルート部門第1位、コスモス賞(聴衆賞)、兵庫県知事賞、神戸新聞社賞受賞。平成24年度優秀学生顕彰文化・芸術分野大賞。2013年皇居桃華楽堂にて御前演奏。第82回日本音楽コンクールフルート部門第1位。岩谷賞(聴衆賞)、加藤賞、吉田賞、E・ナカミチ賞受賞。これまでに二藤部裕一、佐野悦郎、金昌国、高木綾子の各氏に師事。現在、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程1年に在学中。





『石けり』(2013年)より

くぼ・ゆうたろう

1990年大分県生まれ。2012年東京工芸大学芸術学部アニメーション学科卒業。同年東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻入学。2012年に『crazy for it』がオタワ国際アニメーション・フェスティバルにノミネート。また、第16回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門・審査委員会推薦作品に選ばれる。2013年に『石けり』がプチョン国際アニメーション・フェスティバルのオンライン部門で優秀賞を受賞。

プチョン国際学生アニメーション・フェスティバル オンライン部門優秀賞

## 久保雄太郎

◆大学院映像研究科アニメーション専攻 修士課程2年

高校生のときテレビのアニメ特集で「エヴァンゲリオン」を知ったのがアニメーションに興味を抱ききっかけでした。それまで見ていたものとなんか違う気がしてすごく面白かったんです。大学は、東京工芸大学のアニメーション学科に進み、在学中に短篇アニメーションや実験映画に触れて、作品としてのアニメーションに対して関心が深まりました。アニメーションの歴史を学ぶ授業のなかで、カナダの作家ライアン・ラーキンの『Walking』という作品を観て、打ちのめされました。ラーキンは、アカデミー賞にノミネートされながら、その後、路上生活をするなど、とても印象的な作家で、彼の作品に刺激され、自分もこういったものをつくりたいと思うようになったのです。この出会いはとても強烈なもので、短篇をつくっていいこう考えるきっかけになりました。

大学の授業で、世界のアニメーション映画祭について紹介された機会がありました。なかでもアヌシー国際アニメーション・

フェスティバル(フランス)は、1日に何百本も作品が上映されるというので、とにかく観に行きたいと思ったのです。そこでアルバイトでお金を貯め、友人たちとアヌシーまで出かけて行ったのです。実際に目の当たりにすると、短編アニメーションの世界でも、海外にはこんなに華やかな場所があるのかと驚きました。大きなスクリーンに作品が流されるのを観たとき、自分もいつかは国際映画祭で上映され、注目を浴びるような作品をつくりたいと思ったのです。

そのころから大学院に進んで、アニメーションをさらに本格的に勉強したいと思うようになりました。藝大の映像研究科アニメーション専攻では山村浩二先生がいますので、ぜひ教わりたいと目指すことにしたのです。先生の作品は学部時代にほとんど観ていて、なかでも『カフカ 田舎医者』が好きです。

プチョン国際学生アニメーション・フェスティバルで賞をいただいた作品『石けり』は修士1年のときの課題です。この映画祭は

現地に行くことができなくて残念だったのですが、アジア圏では比較的大きな規模のアニメーション映画祭のようです。ひとりの男の子が、自分でルールをつくって石を蹴りながら家に帰る。そのうちルールに縛られ、苦戦していく。そして最後は、石から別の対象に興味が向いてしまうといったストーリーです。ぼく自身の子どものころの経験や感情を反映した作品だといえます。

この作品の制作過程でも、物語の流れや手法について山村先生から指導を受けました。先生からは、技術的なアドバイスなどももちろんいただくのですが、それよりも制作の過程で作品の方向性がブレたときに軌道を修正してくれるのです。まだまだ作品の数をこなしていないので、どうしても悩んでしまうことが多いのですが、先生のちょっとした一言に、発想を転換できたこともあります。またアニメーション専攻には意識の高い仲間が集まり、みんながライバルで、自分にとって非常に刺激のある環境です。